

本論では、視線知覚や視線理解の研究が今どのような状況にあり、またいかに広がりつつあるのか、その全体像を鳥瞰しておくことにしたい。具体的には、まず、最も身近な対象である私たち自身、すなわち人間の大人に、視線に関わる、いかなる特別な処理機構があるのかについて自覚してみることに始めよう。その上で、そうした視線処理機構が長い系統発生の歴史の中で、いかに進化してきた可能性があるかを、基本的な進化心理学の概要を踏まえた上で、またヒトの目の形態・構造的異質性ということにもふれながら、考察することにしたい。次に、今度は視線読み取りの機構が私たち人間の個体発生の次元で、いかに、どのような要因の影響を受けて発達変化し、さらにそれが子どもの心の理解や言語発達などにいかなる意味を持ち得るかについて概観することにしよう。また、ここでは視線と表情の密なる関係性の理解とその活用が、人間の子どもの発達の可能性をいかに大きく拓き得るかということについても考えることにする。そして最後に、そうした視線読み取りの発達が何らかの要因によって阻害された時にいかなることが生じるのかを、特にこのことに関して研究の進展が著しい自閉症児の場合を通して論考し、その発達の支援の方向性などについても多少とも言及することにしたい。

### (1) ヒトの大人における視線方向検知の基礎的メカニズム

元来、知覚研究の領域では、視線処理に関わる特殊な心理学的および神経学的メカニズムの存在が早くから注目を集めてきた。その一つに、反射的視覚定位 (reflexive visual orienting :Driver et al.,1999;Friesen & Kingstone,1998;Hood et al,1998; Langton & Bruce,1999)、すなわち、目や視線といった、ある特定方向を示す社会的手がかりが、それを察知した者の注意を反射的にシフトさせるというメカニズムがある。その存在は、例えば、左右上下などに向けられた目を伴う顔をスクリーン上に瞬間呈示した後で、新たに点などのターゲット刺激を同じスクリーン上の様々な位置に示し、実験協力者にそれがどこに現れたかを判断させるという実験状況で明らかにされる。顔提示とターゲット提示の間隔が短く、なおかつ視線方向とターゲットの位置が合致している場合で、特にその反応が迅速になるのである。このことは、意識的には自覚できないくらいの刹那的な呈示であっても、私たちが視線の向きを敏感に検知し、その向きに自分の注意を反射的に移動させてしまうがゆえに、それだけ、その移動させたところにターゲットが現れた場合にその位置判断の反応が素速くなるのだと解釈できる。実のところ、こうした効果は、例えば、矢印などの物理的刺激では生じにくく (Jonides,1981)、また、それに関わる神経回路が、ある物理的刺激の突然の運動開始や明るさの変化などの反射的注意シフトに関わる脳部位とは明らかに異なる (Kingstone et al.,2000) ことなども知られており、人の視線や頭部回転等に関する反射が、一般的な反射とは区別されるべき特殊なメカニズムに由来するものであることが窺える。

また、視線方向の検知については、様々な対人的情報処理あるいはまた情動反応との密接な関連も示唆されている。ある研究 (Hood et al.,2003) においては、正視した顔刺激と視線を脇にそらした顔刺激を複数呈示し、その後、一定間隔を置いて、再びそれらの顔刺激を (目を閉じた状態で) 呈示した際に、前者の条件の顔再認が、大人および6~7歳児とともに、すぐれるという傾向が認められている。また、別の研究 (Macrae et al.,2002) では、視線状態の異なる顔刺激 (正視・逸視・閉視) を瞬間呈示 (150ms) した後、それらの顔の性別判断と、新たに示された文字列が有意味の単語か否かの判断を実験協力者に求めたところ、正視条件で性別判断がより迅速になされ、またその性にステレオタイプの合致する単語が示された時に、特にその有意味性の判断が速まることが明らかになっている。

これらの研究知見は、他者の正視、換言するならば自己と他者の相互注視状況が、個人の記憶・同定、性別判断およびそれに絡む意味・情報の処理などの、対人知覚・認知過程に促進的効果を有している可能性を示している。他者が自己を直視している状況とは、その他者が潜在的に自己に何らかの形で関わり得る、あるいは、関心を寄せ得る状況ということができ、他者の正視に接すると私たちの情動的覚醒水準は確実に上昇し、それが各種対人的情報処理にも影響を及ぼすようである (Langton,2000)。現に、こうし解釈を裏づけるように、近年のニューロイメージング研究は、他者の正視を検知した際に、情動中枢として知られる脳中の扁桃体が強

く賦活することを明らかにし、日常の相互的なアイコンタクトそのものがある種の情動をダイレクトに喚起させ(Kawashima et al., 1999)、他者の顔の魅力(Kampe et al., 2001)や情動表出(Wicker et al., 2003)の評価とも、脳活動の上で密接な関連性を有している可能性があることを明らかにしている。もっとも、ただ、他者の正視を検知した時のみに、特定情動の活性化や認知が促進される訳でもなさそうである。最近、行われたある研究(Adams & Kleck, 2003)によれば、正視は、怒りや喜びといった、他者への近接に関わる情動の知覚を促進させる(逸視よりも正視した顔において怒りや喜びの表情は迅速に判断される)のに対し、逸視は、恐れや悲しみといった他者からの回避に関わる情動の知覚を促進させる(正視した顔よりも逸視した顔において恐れや悲しみの表情が迅速に判断される)傾向があるという。いずれにしても、私たちに、人の視線方向をきわめて素速く捉え、そして、それを通して特定の社会的判断をなすようなメカニズムが備わっているということが言えそうである。

バロン-コーエン(Baron-Cohen, 1995)は、こうした視線処理に関わる特化した心的メカニズムの総体を"視線方向検出装置"(EDD: eye direction detector)と呼び、その機能として、環境に潜む眼および眼様刺激を検知すること、視線方向(正視・逸視等)を計算すること、何ものかを"見ている"という心的状態を視線の送り手に帰属することの3つを挙げた上で、この装置が目による精細なコミュニケーションの一種のリテラシーを提供すべくヒトおよびその近縁種において飛躍的に進化してきた可能性を論じている。彼によれば、このEDDは、個体発生のきわめて早い段階から、他個体の意図性の計算処理(ものの動きに自己運動性・発動性を察知し、そこに何らかの意図を読みとる)に関わる"意図性検出装置"(ID: intentionality detector)とともに作動し始め、後述する、この後時期的にやや遅れて生じることになる"注意共有メカニズム"(SAM: shared attention mechanism)[自己と他者とがともに注意を向ける特定対象を同定した上で、他者のその対象に対する意図やその他の心的状態を読み取る機構]の発生を準備し、さらには、人の種々の行動とその背後にある感情、欲求、信念などの体系的な推察・予測を可能にする基本機構、すなわち"心の理論モジュール"(ToMM: Theory of Mind Module)の基盤を作り上げるのだという。後でもふれるが、バロン-コーエンが仮定するようにEDDを完全に生得的な進化の産物と見なし得るかどうかにについてはいくつかの議論があるのだが、少なくともある程度、個体発生が進行した後においては、それがかなり明確な脳神経学的基盤に支えられていることは確かなようである。現在では、視線知覚に絡む特異部位として上側頭溝(STS: Superior Temporal sulcus: 上側頭溝)が同定され、他者の正視のみに選択的に反応する神経細胞や逸視のみに特異的に反応する神経細胞などの存在が明らかにされている(Allison et al., 2000; Haxby et al., 2000; Hoffman & Haxby, 2000)。

このバロン-コーエンのEDDに関わる仮説は、視線理解およびマインドリーディングの領域において広く認知されるところであるが、その基盤とされるSTSの機能に関してはそれを純粋に視線処理のみに留めて考え得るのかどうかについて、若干の見解の相違があるようである。ペレットとエミリー(Perrett & Emery, 1994)によれば、他の生物個体がどこに注意を向けているのかは、その個体が発する視線方向のみならず、頭部回転(顔の向き)や身体姿勢といった多様な手がかりによって同定されおり、STSはそれらの手がかりを総合して、他個体の注意の位置を計算する脳部位であると把握すべきだという(この論者らはこのメカニズムを注意方向検出装置: direction of attention detectorと呼んでいる)。また、STSには、こうした複数の手がかりが同一方向で合致しない場合に(例えば顔は左側を向いているのに目は右側を見ているなど)、身体姿勢よりも頭部回転を、さらに頭部回転よりも視線方向を、優先処理する回路が組み込まれているのではないかという。しかしながら、さらにより最近の研究では、視線方向が最も優先的に処理されるということに関してやや否定的な結果が得られているようである。というよりはむしろ、ワラストン(Wallaston, 1824)やブリュースター(Brewster, 1832)による古典的な研究知見、すなわち、視線方向は同一でも、顔の向きが異なる場合には、視線方向の判断に食い違いが生じるということが再確認されてきていると言ってもいいかも知れない。ラングトンら(Langton, 2000, 2004; Langton & Bruce, 2000; Langton et al., 2000)によれば、視線方向と顔の向きは、そしておそらくは指さし方向も、ほぼ同じ重みで独立並行的に処理されており、矛盾する場合には相互に干渉し合う性質を有しているのではないかという。

現時点において、他者の注意の所在を特定する場合に、どれだけ視線方向が特権的な意味を有するのか、ましてや、バロン-コーエンが仮定するように、それ自体の処理が独立特化したモジュール性(機能単位)をなしていると言い得るのかについては結論できない。また、この議

論は、系統発生的観点および個体発生的観点から見ると、さらに複雑な様相を呈してくる。後述するように、ヒト以外の霊長類や若い人間の子どもは、他者の注意の特定に視線以上に顔の向きなどの他の手がかりを用いている可能性が高いからである。もっとも、私たち人間が、発達過程のある時点から、視線方向を、重要な手がかりの少なくとも一つとして、他者の心の読み取りを行うのは確かなことであり、その社会的生活における意味の大きさはいくら強調しても強調し過ぎることのないものと言えるだろう。

## (2) 視線読み取りの進化論

### 2-1) 視線読み取りの系統発生と個体発生

上述したように、少なくとも私たち人間の大人には、ある明確な神経学的基礎に支えられた、目や視線の処理に絡む特殊な心理学的メカニズムが確かに備わっているようである。そして、そうしたことから、パロン-コーエンの EDD や SAM をめぐる言説に代表されるように、相当数の論者が、それを進化のプロセスを通してヒトという生物種に仕込まれた、特殊な情報処理メカニズム、すなわち生得的な認知モジュールの一種であると見なすに至っている。近年、隆盛になりつつある進化心理学は通常、ヒトの心を汎用型の大型コンピュータとしてではなく、それぞれ機能特化した小型コンピュータの寄せ集め、あるいはヒト固有の生態学的環境において個体が多く典型的に遭遇する（してきた）であろう複数の適応上の難題にそれぞれ迅速・的確に対応するのに適した処理装置（="ナイフ"）の束、すなわち"スイス・アーミーナイフ"のようなものであると仮定する（e.g. Cosmides & Tooby, 1994,1997; Mithen,1999; Pinker,1997, 2002; Tooby & Cosmides,1990,992）が、視線処理のメカニズムもこの内の一刀と把握されるというのである。

こうした仮定は、一見、視線処理モジュールのプログラムやインストラクションが、私たちがこの世に生を受けた時点で、その遺伝子の中に"前成的に"組み込まれていることを思わせる。遺伝子はカプセル化されており、基本的に遺伝外の影響を受けてその性質を変容させることはなく、個体が発達過程の中で経験する環境は、その発動を解発させるトリガーとしての役割しか果たさないというのである（e.g. Buss,1995; Crawford,1998; Pinker, 1997）。現に、パロン-コーエンを始め、視線処理モジュールは、あくまでも系統発生的に構成されてきたものであり、それは、個体発生の中で、予め決められた特定刺激に遭遇することを待って、まさに"然るべき時"に発動し始めるのだと考える論者は少なくない。

しかし、近年、こうした（確かに個体発生の最初の時点では現出していなくとも、その完全なる機構=最終状態の原型は既にそこにあるという）"最終状態生得論"（final state nativism）を非現実的なものとして訝る声も多い。最初期の心を"未だ何も刻まれてない石板"（blank slate）と見なし、経験による刻み込みがすべてと仮定するラディカルな発生主義（radical emergentism）も勢力を失う一方で、より現実的な仮定として"初期状態生得論"（stating state nativism）が力を持ち始めている。そこでは、生物個体が何かを選択的に好み、また何かを拒むといった知覚や行動上のバイアスを生得的・遺伝的に持って生まれてくるということを否定しない（e.g. Richardson,1998）。むしろ、それがあってによって、環境刺激の受容や経験の幅に制約がかかり、その後の発達に一定の方向性が生まれるということが前提視される。しかし、そこにおける環境や経験の役割は単なるトリガーではなく、その質やタイミングが、遺伝子の活性化のパターンを大きく変動させ、結果的に種々の心的機能の漸成的構成に深く関与すると仮定されるのである（Lickliter & honeycutt,2003）。系統発生的にいかなる遺伝子を有しているかということ以上に、その遺伝子が個体発生の中でどのタイミングでどのような順序性をもっていかに活用されるか（例えばプロモーターと呼ばれる、いわゆる遺伝子作動のためのスイッチが、時間軸上においてどのようなオン・オフのパターンをなして進行するのか）ということがより重要であり、そこに必然的に絡むものとして環境や経験の役割は甚大であるということになる（Ridley,2003,2004）。リドレー（Ridley,2003）が強調するように、多くの場合、"生まれ"（遺伝子）は"育ち"（環境）を通して（nature via nurture）、初めてある形（表現型）をなすに至るのである。

ヘイズ（Heyes,2003）もやはり、多くの心的機能をただ唯一、進化の産物と見なし、必ずしも十分な根拠なくその生得性や系統発生的起源ばかりを強調する進化心理学の行き過ぎに警鐘を

鳴らし、つい、系統発生的に構成されてきたと仮定されてしまいがちな各種の認知メカニズムが実は他の原理によって説明され得る可能性を提示している。彼によれば、一般的に認知の進化として議論されるものには、4種のルーツが仮定できるのだという。その1つは"系統発生的構成"であり、それは、例えばヒトにおける言語のように、ある淘汰圧を受けて、まったく別種の認知メカニズム(=モジュール)が特定種に備わったと想定されるものである。2つ目のものは"系統発生的変容"であり、それは空間記憶や刷り込みのように、基本メカニズムは種の違いにかかわらず不変でありながら、自然選択によって、それが処理する入力情報に種による差異が生じたとされるものである。3つ目のものは"個体発生的構成"であり、それは例えば顔の認知や「心の理論」のように、発達過程における経験の影響を受けて、先行状態とは質的に異なる特殊な認知メカニズム(=モジュール)がある特定の発達時点に生起してくると想定されるものである。そして、4つ目は個体発生的変容であり、それは例えば模倣のように基本メカニズムは同一でありながら、個体の発達プロセスの進行とともに、それが処理する入力情報に徐々に変化が生じるとされるものである。

この4種のルーツは必ずしも排反の関係にはなく、例えば顔の処理は、個体発生的構成であると同時に系統発生的変容とも考え得るものであるという(顔貌に関する認知メカニズムそのものは多くの種に認められるものである同時に、それぞれの種に特化した顔の入力情報を処理するように変容しており、しかもそれは各種ごとの個体発生の中で大きな質的变化を起こす)。ヘイズ自身は、この論の中で、直接、目および視線の処理メカニズムそのものについては取り上げてはいないが、顔の認知および心の理論に関わる部分的証左の中には、潜在的に目や視線の処理に重なるものも多く含まれており、また本論のこの後に示す様々なデータから、筆者は、この目に関わるメカニズムも基本的には、系統発生的変容と個体発生的構成の両側面から捉えるべきものと考えたい。

この後、見るように目や視線方向に対する敏感性は決してヒト固有のものではなく、その処理メカニズムは系統発生の歴史の中で、ある種以降、多くの生物種に亘って遺伝的に具備されるに至ったのだと考えられる。しかし、いかなるシチュエーションでどれだけ精妙な視線情報を読み、そこからいかなるものを読み取り得るかというところには、大きな種間差が存在するものと言える。ヒトが、霊長類を始めとする他生物種と、視線処理あるいはまた見られ読まれるものとしての眼目構造において、どれだけの重なりを持ち、また差異を有するのかは、現今の視線理解の研究の主要な問いの一つである。また、前節でも見たような様々な証左からして、私たちヒトの大人においては確かに、その視線処理メカニズムを特殊な認知モジュールの一種と仮定することにさほどの過誤はないのかも知れない。しかし、それはどちらかと言えば、個体発生の過程において"漸成的にモジュール化されたもの"と言うべきものであり、必ずしも私たちがこの世に生を受けた時点において既に"生得的なモジュールとして具備されていたもの"ではないと考えられる。漸次的に構成されるものである限りにおいて、その発達の過程は当然、精細に問われるべきものとなる。子どもがいつ頃、どのような形で視線の読み取りに関わる様々な能力やメカニズムを獲得し、またいかなる場合にそのプロセスに遅れが歪みが生じるのかは、現今の視線理解研究のもう1つの根本的な問いと言える。

比較行動学の巨人であり、現在の進化心理学の礎を築いた1人としても数えられるティンバーゲン(Tinbergen, 1951)は、生物のある特異な傾性を認めた時に、その性質はいかなるものか、その機能は何か、それはいかなる系統発生の歴史を有するのか、さらにそれはいかなる個体発生のプロセスを辿るのかという4つの問いに正当に答えるべきだとした。しかし、近年の心の生得性を強調する進化心理学の流れの中で、第4番目の個体発生に関わる問いは相対的に等閑視される傾向があったことは否めない。本論では、目と視線理解のメカニズムに、系統発生と個体発生の両面から可能な限りバランスよくメスを入れていくことにしたい。

## 2-2) 「心の理論」の先駆体としての視線理解の進化

既にふれてきたように、目や視線に対する特別な敏感性は、ヒトという種に限られたものでは必ずしもない。生物個体は自らの利害に深く関わるものに当然、多くの場合、注意を向け、しかもその利害はその周りに位置する他の生物個体にもかなりの確率で潜在的に関わり得るものであるため、他個体の視線を素速く感知し、その先に目をやることは、効率的な社会的学習という意味において、きわめて適応価が高いものと言える(e.g. Tomasello et al., 1999)。現に、様々

な生物種において、一般的に同種内であれば、特に視線と顔の向き（頭部回転）という複数の手がかりが活用できる場合は、他個体の注意方向にかなりの精度で定位し得るということが知られている。例えば、犬や山羊でも、同種の視線追従を行い得る(e.g. Hare & Tomasello,1998)し、霊長類に至っては、そのほとんどが同種の視線の動きに随伴的な反応を示し得る(Tomasello et al.,1998)という。また、霊長類の中には同種のみならず、時にヒトの視線にも追従する種が複数存在しており、殊に、チンパンジーは、時に頭部回転を伴わない視線だけの動きに対しても瞬時に反応し(Povinelli & Eddy,1996)、また、ターゲットが自らの（視野外である）上部や後部にある場合でも視線追従を行い得る(Itakura,1996; Povinelli & Eddy,1997)。そして、それは、単に、ただ顔や視線の動きに反応して同方向を向く（顔や視線が示すベクトルに自らの視線を沿わせる）ということではなく、明らかに、視線の先にある（はずの）目標を計算し、それに確かに注意を向けようとしている（目と対象を結ぶ見えない幾何学的な線を覚知している）ことの現れであると解し得るという。

例えば、チンパンジーは、自らと他個体（人間の実験者）との間に不透明なバリアが部分的に存在し、その他個体が何に注視しているのか、物理的には特定できないような状況下においても、何とか、その他個体の視線が注がれているそのバリアの手前側（チンパンジーにとっては自分に見えているのと反対側）を覗き込もうとすることが認められている(e.g. Povinelli & Eddy,1996a)。また、他個体の視線や顔の方向に、比較的近接した2つの対象（他個体が実際に注意を向けるターゲットとそれ以外のもの）があり、自らが他個体と同方向を見ようとした際に、その他個体の注視対象ではない、もう1つの対象が自然と先に目に入ってくるような状況でも、しかもそれが美味しい食物のように際立って魅力的なものであっても、彼らは、あくまでも他個体の注視対象の方に自らの視線を合わせ得るという(e.g. Tomasello et al.,1999)。さらに、チンパンジーが他個体の視線追従をした時に、その視線の先に特に何も興味を引く対象が見当たらないと、もう一度その他個体の顔を覗き込み、再度その視線の方向に目をやるというようなことも報告されている(Call et al.,1998)。これらの一連の実験結果は、チンパンジーがただ一般的な定位反応(generic orienting response)として他個体の目や顔の動きに同調している訳ではないことを意味するが、比較的最近のヘアらによる実験(Hare et al.,2000,2001)に至ってはさらに強力に、チンパンジーが他個体の視線の覚知を通して、その個体の知覚経験がいかなる内容のものであるかを知り得るということを示唆している。その実験は、2種類の食物が準備された部屋にチンパンジーの優位個体と劣位個体を一対一状況にして置き、彼らがそれぞれ、それらの食物をめぐるいかなるふるまいをするかを観察したものである。ただし、2種類の食物のうちの1つは両者に見えるが、もう1つは不透明なバリアの後ろに置かれ、劣位個体にはしか見えないようになっていた。結果は、劣位個体が優位個体よりも少しだけ早く放された時に、両者に見える食物ではなく、自らにしか見えない隠された方の食物をより多く選び手に入れるということを示すものであった。この結果から窺えることは、チンパンジーには、相手には何が見え、また何が見えないのかということをも自分の知覚経験とは分けて推察する能力が備わっている可能性があるということである。

このように（多くトマセロらの研究グループに代表されるように）、チンパンジーは既にヒトに近い視線読み取りのコンピテンスを備えており、見るということの心理学的意味（視線は、他の個体が何らかの心的状態をもって特定対象に注意を向けているということを示す）をある程度理解しているのだと解釈する向きがある(e.g. Call & Tomasello,2003)一方で、これに対して慎重なスタンスをとる研究者もある。例えば、ポヴィネリらのグループは、これまで巧みな実験によって、チンパンジーの目や視線の理解について卓越した知見を数多く得てきた(e.g. Povinelli et al.,1990;Povinelli & Eddy,1996a,1996b)が、彼らはチンパンジーの視線に絡む種々のふるまいについて、彼らはどちらかといえば賢い行動主義者とでも言うべき存在（他個体の心的状態ではなく、あくまで外的に把握できる姿勢やふるまいについての複雑なルールを発見・習得する者）であり、注視活動を目には見えない"心"に結びつけて解釈し得るのは唯一、ヒトのみではないかという見解を有している(Povinelli et al.,2002)。確かに、チンパンジーは、食物が隠されたのを見ていない実験者よりも、見ていた実験者に指さし等のジェスチャーを送り食物をくれるよう懇願する(Povinelli et al.,1990)し、また他個体が前を向いているか後ろを向いているか（ある特定のものを見得るか否か）に応じてその個体に対する態度を変える(Povinelli & Eddy,1996b)。しかし、これらの結果は人間とともに生活するチンパンジーが、単に顔が見えている訓練者を信用することを学習したに過ぎないという解釈可能性をいささかも排除するもの

ではない。

現に、1人は目隠し(視界閉鎖)、1人は猿ぐつわ、あるいは1人は目隠し(視界閉鎖)、1人は耳隠し、あるいはまた1人は頭にバケツ(視界閉鎖)、1人は肩にバケツ、さらにはまた1人は後ろ向き(視界閉鎖)で、1人は後ろ向きだが肩越しに振り返って見る、というような一連の対比的実験状況で、最初から、前者と後者を識別し、食物の懇願を後者(すなわち目を見開き食物を見ているはずの訓練者)に選択的に行ったチンパンジーはほとんどなく、徐々に試行を重ねる中でいくらかそのパフォーマンスを向上させた個体が数頭存在したのみであったことも報告されており(Povinelli & Eddy, 1996b)、チンパンジーには(より顕在的な手がかりとしての)顔の向きに素速く適切に反応する能力は相当備わっているが、基本的に目の心理学的重要性についてはあまり理解が成り立っていない可能性は否めない(ちなみにヒトでは2歳児でも、視覚が妨害されない実験者に優先的にしぐさを送る)。さらに、より最近の別の実験(Karin-D'Arcy & Povinelli, 2002)では、先に見たヘアラの優位個体と劣位個体の競合的状况に関する追試を行い、確かに優位個体には見えない場合に劣位個体はその食物を手に入れやすいが、劣位個体が、優位個体には見えない食物の方に、見える食物よりも最初から先に近づこうとするという一貫した傾向は認められず、単に優位個体が最初に見える食物を容易く手に入れてしまうため、結果的に残る(優位個体には見えない)食物を劣位個体が入りやすくなるということに過ぎないのではないかという解釈を施している。ポヴィネリら(Povinelli et al., 2002)によれば、チンパンジーは直接観察可能な身体、頭部、顔や目などの状態や動きをうまくモニターし、それらに対して適切に反応し得るようになるが、別の言い方をすれば、各種身体変化と外界の事象との随伴関係の検出に徐々に長じるようになるが、それらを、特に心的状態の観点から解釈することなく、しているのではないかという。

前節のヘイズの枠組みを借りれば、少なくともそのパフォーマンスで見ると、目に対する特殊な感性や視線読み取りの機構は、決してヒトという種において初めて特権的に生じたもの、すなわち"系統発生的構成"の産物ではなく、明らかに系統発生途上のある時点において現出し、その後、多くの種に亘って漸進的に進化してきたもの、すなわち"系統発生的変容"の産物であると考えられる。しかし、他種と比較した時に、どこまでが共通で、どこからがヒトにおける認知的特殊化と言い得るものなのか、いまだ不明瞭な点が少なくないと言える。特に、上で見たように、見る行為が知るといふ心理学的状態に密接な関係を有していることを理解しているか否か、すなわちいわゆる後述する"心の理論"の先駆体とも言うべきものを具備しているか否かについては、現在ホットな論争が続いている。ミッチェル(Mitchell, 1997)は、系統発生の歴史において、見ることと知ることの関係を理解できないし学習もできないレベル、

見ることと知ることの関係を知らないが、その学習がある程度可能なレベル、見ることと知ることの関係についてある一定程度の生得的な知識を有するか、非常に早くにそれを容易に学習する素質を有して生まれてくるレベルの3つのレベルを設け、にチンパンジーを、にヒトを配しているが、こうした仮定が果たして妥当なのか、新たな証左の現出に目が離せないところとなっている。ちなみに、板倉(印刷中)はこれに関連して、チンパンジーにおける他個体の目や視線に対する高い感受性と"見ることと知ることの関係"の理解の間において、重要な意味を有するものとして他個体の注意の状態の覚知を想定した上で、チンパンジーが相手の注意のチャンネルが自分に対して開放されているかどうかを判断し、それに基づき適切な反応を起こし得るか否かを今後、精細に解明していくことが一つの鍵になるだろうとしている。

### 2-3) 読まれるための眼目構造の進化

当然のことながら、目という感覚器官を有するすべての生物種は、多くの場合、自らの生存や繁殖において重要なものに視線を向ける。その先には、例えば潜在的な餌食や配偶パートナーがいるかも知れない。そして、そうしたものとして、他個体の視線にさらされ関心の対象になっているのが他ならぬ自分自身である場合、それを迅速に察知できる方が、当然高い適応価値を有するということになるだろう。また、視線が自分自身ではなく他に向けられたものであっても、その視線の行方を精確に分析し得る個体は予め効率よく、自らにとっての潜在的な利害を知ることができよう。こうした状況下において、他個体の眼目を特別な視覚刺激として察知し、そこから適切な情報を抽出するための特殊な脳神経メカニズム、すなわち他個体の視線を



「読むための目」が多くの生物種に亘って、徐々に進化してきたものと考えられる (Langton,2000)。

ただし、逆に、ある重要な利害関心をもって視線を放つ個体の側からすれば、その視線をまんまと読み取られてしまうことはむしろ不適応事態を招来することにもなりかねない。そのために、多くの生物種においては、眼目の存在やその動きがあまり目立たないような、あるいはそれらをむしろカモフラージュするような、眼目構造が備わっていると言える。しかし、この点においてヒトはきわめて例外的な存在であることが知られている。少なくとも私たちヒトにおいては、視線がかなり明確な意味を担うノンバーバル言語として機能しており、特に視線の方向が検知されやすいような目の構造（強膜と瞳孔・虹彩の鮮明なコントラスト）、すなわち「読まれるための目」が特異的な進化を遂げていることが窺われるのである (Kobayashi & Kohshima,1997)。

小林・橋彌(印刷中)で詳述されているように、目の横幅が広く、いわゆる白目と黒目の対照性が際立っているヒトの目は、環境世界の中できわめて顕在的であり、そしてその中核部分の黒目の動き、すなわち視線の移動を顕わにかつ精妙に、他者や他の生物個体に示すことになる。このことは、ヒトが、その元来、構造的に注目されやすい目を通して結果的に、自らの存在を他個体に強力にアピールしてしまうということを意味する。捕食者の視点からすれば、それだけ探す手間・コストが省ける訳であり、考え方によっては、ヒトほど恰好の餌食はないのかも知れない。そればかりではなく、ヒトの目はその視線の向きや動きを通して、まさに"心の窓"さながらに、その個体が何に関心を寄せ、時に、それに対していかなる心的状態を有しているかある意味、ただ垂れ流してしまっても言える。せっかく美味で栄養価の高そうな果実を見つけても、それに向ける視線を素早く、近くに位置する他個体に察知されてしまえば、自らが手を伸ばす前にそれを横取りされてしまうかも知れない。もし、このように、目や視線がただ一方向的に、また受動的に読まれ、情報を盗まれるだけならば、これほどリスクの高いものはないだろう。しかし、ここで刮目すべきことは、ヒトにおいては、目が"読まれる"ものであると同時に、他個体に対して能動的に情報を送り、それを"読ませる"ものにもなっている可能性がきわめて高いということである。つまり、小林・橋彌(印刷中)が指摘するように、それは、個体間において双方向的に情報を伝え受け取るための重要なコミュニケーション・ツールとして機能しており、そこから得られるベネフィットが先に述べたようなリスクを上回るからこそ、かくも特異な目の構造が私たちに備わっているのだと考えられるのである。小林・橋彌の論考はさらに進んで、眼目構造（眼裂横長度・強膜露出度）と群れサイズおよび脳における新皮質の比率との間に高い相関性があることを見出し、ヒト（およびその近縁種）の目が、飛躍的に群居性が高まったことによって困難となった直接的なグルーミング（毛づくろい）を補い、あるいはそれに代わって、個体間における親和関係の確立・維持の機能を、言語とともに担うようになったのだという、独自のゲイズ・グルーミング仮説を提唱するに至っており、今後の展開が大いに注目されることとなっている。

なお、ヒトの眼目構造は、通常一般の知覚刺激と変わらず、ただ、中核部と周辺部の強い色彩コントラストがあることによって、捉えられやすいというだけではないらしい。比較的最近、ある研究者ら (Ricciardelli et al.,2000) は、様々な方向に視線を向けた目における虹彩・瞳孔の暗色と強膜の白色を実験的に反転させて呈示した時に（例えば黒目を白く、白目を黒くして見せた時に）、それを見た者の、視線の方向知覚が、大幅に精確さを欠くようになることを明らかにしている。つまり、このことは、コントラストによって示される幾何学上の手がかりだけではなく、あくまでも黒目は黒目であり、白目は白目であることが、ヒトの精妙な視線知覚には必須要素であるということを示唆する。長い進化の歴史において徐々に"読まれる目"の構造が特殊化したのならば、他の何ものでもなく、まさしく、その特異な目の構造に合わせ特化した"読む目"（すなわち視線処理のエキスパート・システムとでもいうべきもの）もまた共進化する必要があったということだろう。

ちなみに、2-1)でふれたヘイズ (Heyes,2003) の論考は認知の進化に限定したものであるのだが、仮にその枠組みに依拠して身体構造の進化を考えてみた時に、ヒトの眼目構造はどのように理解できるのだろうか。おそらく、それは年齢による構造的差異をさほど大きくは見せないという意味で、少なくとも個体発生の次元で論じ得るものではなからう。問題なのは、それが系統発生的構成と見なし得るものなのか、変容と見なし得るものなのかということである。小林・橋彌(印刷中)が明らかにしたように、多くの種における眼目構造と群れのサイズや大脳

皮質の間には高い相関があり、その意味で、それは漸次的に変容してきたことを示唆するものである。しかし、中核部と周辺部の単に面積比だけではなく、その色彩や明度のコントラストも含めて見た時に、ヒトの眼目は、その視線の動きを、もはやカムフラージュするものではなく、むしろアピールするものとなっている。つまり、そこには機能上の反転があり、それを生じさせた構造上の変化は、漸成的変容と言うよりは質的な激変であり、それをヒトという種に限定された特殊化、すなわち系統発生的構成と解釈することもあながち的はずれではないのではないかということである。現段階において筆者はそれを検証するにたるデータを手にしていないが、今後、追究されるべき問題であることは確かであるように思われる。

### (3) ヒトにおける視線読み取りの起源と発生

#### 3-1) 視線理解の発達の里程標

先述したように、視線理解には他種と共通した要素とヒトという種において特殊化した要素の両側面が存在することが窺えた。しかし、先にヘイズ(Heyes,2003)の枠組みに従って見たように、視線理解は、"系統発生的変容"のみならず、"個体発生的構成"という次元からも把握されるべきものであり、ヒトという種に、際立って精細な目や視線の読み取りのメカニズムが、ある特異な遺伝的基盤を伴って備わっているらしいとは言っても、そのことが即、ヒトの乳児が出生時点から既にそうしたメカニズムを"完成体"として有し、作動させているということの意味する訳では当然ない。確かに、ナイサー(Neisser,1991,1994)が仮定するように、乳児は顔や目も含め人が発する種々の社会的刺激に独特の感受性を備えて生まれ、生誕時からそれに応じて"対人的自己"を統合的に発動させ得る存在なのかも知れない。現に、(一部の例外を除き)他の霊長類と比較した時にヒトの乳児とその養育者との相互凝視が、早期段階から際立って多いことが知られている(e.g. Rochat,2001)。しかしながら、出生後間もない乳児は他者の目を見はしても(視覚刺激としての目に反応しても)、未だ目とその先にある対象との間の見えない"線"を察知し、他者のその対象に対する心理的スタンスを感受する存在ではないようである。子どもは他者の目をただ"見る"段階から出発し、一定の時間を経て漸次的に、視線の先にある対象を"察し"、そして、やがてその裏に隠された意図・欲求・信念といった様々な心的状態を"読む"段階へと移行していくものと考えられる。まさに子どもは、こうした一連の視線理解の発達とともに、他者との広く深いコミュニケーション・ネットワークに参入し得るようになるのであり(Butterworth & Jarrett, 1991)、また、知の保有者たる他者に焦点化し他者が視線に込めた情報を活用することで、社会的・物理的世界に関する知識を実に効率よく飛躍的に拡大していくことが可能になるのである(Tomasello,1999)。その意味で、視線理解は人生早期において最も重要な発達の要素と言えるものであり(Hay,1999)、それが時間軸上において、どのように萌芽し、また発達するのか、そして、その展開にいかなる要因が絡み得るのかについて知見を得ることにはきわめて大きな意味があると言える。以下では、現在までに、どのような発達の里程標が想定されているのかを、概観整理しておくことにしよう。

新生児段階から、人の顔に対する独特の選好が認められることは、1970年代から既に広く知られてきた。しかし、より最近の研究は、それが、顔そのものというよりも、むしろ顔"らしき"ものに注意を向ける知覚的バイアスと解釈されるべきものであり、また、2つの目はその好みの知覚的パターンを構成する要素として重要な役割を果たしている可能性を示唆している。例えば、テュラティら(Turati et al.,2002)によれば、新生児が好む顔刺激の要件は、顔の上部と下部の密度上の非対称性であり、顔の上半分に構成要素が相対的に多くある場合に、子どもはとりわけその刺激を好んで見るのだという。例えば、顔の構成要素の中でもとりわけ顕在的なものとして目と口を考えることができるが、目が2つなのに対し、口は1つであるため、それだけで顔図式を作った場合は、顔の上半分の密度がより高いことになり、乳児はたとえそれらが普通の顔のように左右対称に配置されていなくとも(どちらか一方に偏っていても)その刺激を選好するらしい。また、目と口がその配置パターンを通常のままに留めていても、それらすべてが顔の下半分にある図式は好まれず、逆に、口が2つの目の上に置かれすべての要素が顔の上半分に配置された刺激には相対的に注意を向けやすいのだという。こうした研究知見は、新生児段階においては、2つの目が、知覚的に好まれやすいゲシュタルト(上下非対称性)を構成する要素として、まさに、その位置にあることが、すなわち顔の中心線よりも上部に位置



することが重要であることを示唆する。

しかし、このことは出生直後から、新生児の関心が顔の全体的ゲシュタルトとは独立した目そのものに向かうということを保ずしも意味するものではない。誕生間もない頃から乳児は閉じた目よりも開いた目に注意を向けるという報告も一部にある(Bakti et al.,2000)が、これまでの研究を総括すると、乳児が特に2つの目に特別な関心を寄せるようになるのはだいたい2か月頃からであり(Haith et al.,1977; Maurer, 1985; Morton & Johnson,1991)、また3か月頃からは時に他者の視線の動きに連動して自らの視線を素速く動かし(Hood et al.,1998)、およそ4か月までには他者の正視と逸視を区別し得るようになるらしい(Vecera & Johnson,1995)。こうしたことは、少なくとも生後3~4カ月の段階から既に、先に見た反射的視覚定位のメカニズムあるいは視線検出装置(EDD)が作動していることを意味し、また、視線が、養育者などの対面する他者との社会的相互作用を媒介している可能性を示唆する。例えば、トマス(Thomas,2000)は、3か月児を対象に、母親の子どもに対する注視が母子相互作用に及ぼす影響を検討しているが、それによれば、母親が目を閉じている様子は特に子どもにとってストレスフルということではないようであるが、やはり、子どもは母親の目が開いている時に最も活発に活動し、対面する他者の目の開閉は、その人が相互作用の相手として利用可能か否かを乳児が知るための重要な手がかりとして機能している可能性があるという。また、遅くとも生後半くらいまでには、対面する他者の視線のきわめて微細な水平方向の動きを敏感に察知し、自らとアイコンタクトをより長く維持する大人に多く微笑を発するようになるという知見も得られている(e.g. Farroni et al.,2002; Symons et al.,1998)。

上述した知見は、いわば子どもと他者という二項に閉じた関係における視線コミュニケーションと言えるものであるが、生後3か月くらいから、乳児はその視線を通して、並列的二項関係とでも言うべき、2種の二項関係を同時に持ち得るようになるらしい。ある研究者ら(Fivaz-Depeursinge & Corboz-Warnery,1999)は、父母子という社会的三角関係状況にある時に、乳児が、一方の親と活発に相互作用している間でも、しばしば他方の親に視線を送ったり、情動表出したりする様子を見出し、乳児が3者による合同経験を維持しようとしているかに見えるという印象を述べている。この研究者らによれば、こうした乳児の経験は、この後に現出してくる、三項関係における指示的コミュニケーションの先駆体として機能しているのではないかという。

生後1年目の後半には視線理解に関して、ある意味、革命的とも形容詞し得る出来事が生じる。乳児は、それまでのように、もはや単に視覚刺激としての目そのもの、あるいはその開閉の状態や動きに対して反応するだけではなく、時に、視線が、自己と他者という二項の外側にある第3の何ものかに"ついてのもの"であるということ(object-orientedness/aboutness)、すなわち視線の志向的/指示的性質を徐々に理解し始めるのである。このことは、視線を通して、他者の意図がどこに注がれているか、場合によっては、他者がどのような心的状態であるかを知り得るようになることを表し、子どもは、ある特定のものをはさんで、それに他者と共に注意を向けることによって、環境に遍在する様々なものの意味とそれに対する自他の心の状態を他者との間で相互に理解し合えるようになっていく。こうした"共同注意"(joint attention)が可能にする三項関係コミュニケーションは、まさに子どもが、直接は見聞きできない心というものの世界へ実質的に参入し始めるということの意味し、その点においてまさに画期的なものと言い得るのである。

さて、この共同注意とは広義には、複数の生物個体が、同一の対象に対して同時に注意を向けている状態のことを指している。もっとも、これを"同時注意"(simultaneous attention)とし、共同注意という術語には、より限定的な意味を付与する場合もある。すなわち、個体AとBの外側に対象Oが在るという状況を想定した場合、同時注意においては、AとBがともにOに注意を向けていること(A-Oの関係+B-Oの関係)のみがその成立の要件となるが、より狭義の意味においては、これに加えて、AとBが相互に、相手が自らと同様に、Oに注意を向けていることを何らかの形で"覚知"あるいは"理解"していること(A-Oの関係+B-Oの関係+A-Bの関係)が要件となる。

当然のことながら、意図性あるいは何らかの心的状態のやりとりにおいて革命的な意味を有すると目されるものは後者の狭義の共同注意ということになる。この現象にいち早く着目し、その言語発達などに対する発達の意味の大きさを世に問うたのはスケイフとブルーナー(Scaife & Bruner, 1975)であり、彼らは、2か月児でもその30%が少なくとも2試行の内の一つ

において大人の視線の動きを追って自らも視線を動かすこと、また 11-14 カ月児になると、そうした行動がほぼ確実化することなどを見出している。しかしながら、彼らはこの実験結果を共同注意の成立に関わるものとして提示しているが、今からすれば、それは、ターゲットとなる対象が存在しない状況下での子どもの視線追従 (gaze following) 傾向を取り出したものに過ぎない。こうした一般的な視線方向への反応ではなく、あくまでも特例のターゲットに対する視線の理解を問題にしようとした実質的な走りは、バターワースとジャレット (Butterworth & Jarrett, 1991) の研究ということになる。彼らは対面する大人の視線が特定のものに向けられた時に、子どもが、そのターゲットそのものをピンポイントで注視しようとするのか、ただそれがある方向に目をやるだけなのか、あるいは何も反応を示さないのかといったことを明確に特定するために、方法論的にも統計的にも厳密な研究を行い、共同注意の発達に以下の 3 段階を仮定するに至っている。

発達早期からその発達プロセスを順に見ていくと、まず彼らが"生態学的" (ecological) 共同注意と呼んだ行動形態が生後 6 カ月前後くらいから現出する。それは、他者に明確な首の回転などがあり、なおかつ自分の視野内に他者が注意を向ける顕在的な対象が存在する場合に限り、時に他者との間で、同一対象に対する注意を共有することができるという段階である。しかし、この段階では、例えば、他者が首を動かした方向にはっきりと目立つ 2 つの物体 X と Y が比較的近接して存在するような場合、子どもは、たとえ他者の視線が注がれている物体が現実には Y であったとしても、自分が目や首を動かして最初に視野内に入るのが X である時、その X に注意を固着させてしまう。つまり、他者の視線からその先に在る対象を正確に読み取り、同定することが未だできないということである。この共同注意の形態は、頭部回転や明瞭な物体といった知覚的に顕著な生態学の手がかりに半ば反射的に引きずられる形で生じたものと解釈し得るものである。

生態学的共同注意は、子どもの外部にある物理的刺激によって、いわば"外生的" (exogenous) に引き起こされるものであり、いまだ子どもが自発的に起こすいわゆる"内生的" (endogenous) な共同注意とは言えないものである。こうした内生的共同注意の萌芽が認められるのはだいたい生後 9 か月頃からであり、そしてこのことが、先にも述べた (直接的には知覚できない) 意図性の相互理解という要素が共同注意に加わり始めるということの意味する。この頃になると乳児は、たとえ顕在的な対象が明確な形で存在していなくとも、養育者の頭部回転および目の動きをじっと凝視した上で、それらが止まったところに自らの視線を素早く合わせようとし始める。また、そこに目立った対象が探せない時には再び、養育者の方を振り返るようなことも生じ始める。このことは、子どもが他者の視線の先に何かおもしろそうなものがあることを予め期待して、それを自発的に探し求める行為であると解釈できる。バターワースらは、この頃の共同注意を、他者の頭部や目という"点"とその先にある対象という"点"との間に、直接的には見えない"線"を覚知することが可能になっているという意味において"幾何学的 (geometrical)" 共同注意と呼んでいる。

もっとも、この頃の共同注意においても、子どもはまだ、養育者の視線の行き先が自分の背後などの視野外にある場合には、後ろを振り返ってその対象を探すことをしない。純粹に目の微細な動きだけを手がかりにして、自らの視野外も含めて、他者の視線を確実に追い、対象を同定することが可能になるのは生後 18 か月頃からになるという。バターワースらは、こうした共同注意が、直接的には知覚できないところも含めて、空間についての表象が明確に成り立っていないと生じ得ないという意味において、それを"空間表象的" (spatial-representational) 共同注意としている。

ちなみに、アダムソンら (Adamson & MacArthur, 1995; Bakeman & Adamson, 1984) は、共同注意の発達の变化を、日常の生活状況における養育者との関係性の観点から仮定している。それによれば、生後 9 カ月頃までの共同注意は、成立することがあったとしても、あくまでも、乳児の視線方向およびその対象に養育者が合わせることによって生じるものであり、その逆はほとんどないという ("支えられた" [supported] 共同注意)。しかし、9 カ月頃からは子どもが養育者の視線変化に反応・追従し、また養育者と相互作用する中で、自分の注意の対象に養育者の視線を呼び込んで、自発的に共同注意事態を作るようなことも徐々に生じ始めるらしい ("調整された" [coordinated] 共同注意)。さらに、生後 13 カ月頃からは、子どもの言語発達の進行などとも相俟って、言語などの慣習的コードが共同注意事態に頻繁に入り込み、相互注視する対象への命名やコメントなどの活動が親子双方から徐々に積極的になされるようになるのだ

という。

これまでの記述から総じて言えることは、やはり生後9カ月前後に視線理解の一大ターニング・ポイントがあるということかも知れない。漠と他者の視線の方向ではなく、確かにその対象へと注意が向かい、さらにその対象に関する欲求や感情といった種々の心的状態を部分的に他者との間で自発的に交わし得るようになる背景には、この時期に、原初的な心の理解が萌芽している、あるいは少なくともこれから徐々に萌芽しつつあるということの1つの証と解釈し得るのかも知れない(これに絡む議論は後述する)。トマセロ(Tomasello,1993)は、こうした共同注意を始め、子どもの心的理解の発達に潜在的に深く関わり得る複数の現象がこの時期にほぼ同期して現れることから、この時期を"9カ月の奇跡"と呼んでいる。大神(印刷中)もやはり、その千人規模の大がかりな調査研究を通して、共同注意に関わる諸行動が、生後9カ月頃からまさに切り立った"崖"を一気に駆け上るかのよう、急速に発達することを明らかにしている。また、トマセロら(Tomasello et al.,2001)は、アカゲザルとチンパンジーの視線追従の個体発生を検討した上で、ヒトにおけるこの9カ月前後(乳幼児期前期)からの共同注意の開始が、これらの種に比してライフコースのより早期段階から生じていることを見出し(アカゲザルは乳幼児期前期の終わり頃、チンパンジーは乳幼児期後期)、系統発生のプロセスにおいて視線理解の発達に"異時性"(heterochrony:祖先種と子孫種における発生のタイミングの変化)が生じた可能性について論じている。

### 3-2) 視線理解の発達に絡む諸問題

前節ではヒトの乳児における目や視線への反応およびそれらの理解が、どのような発達コースを辿るかについて大凡のところを概括した。しかし、上述した事柄はすべて、既に確定された知見という訳ではなく、そこにはいまだ議論の絶えないホットなトピックがいくつか存在している。

情報としての目および身体 - 視線が放つ情報・身体が発する情報: 議論が喧しいトピックの一つは視線追従という現象に関するもので、それが純粋に目および視線のみに対する反応と言い得るものなのか、それとも、顔の向きや身体姿勢などの、より顕在的な手がかりに対する反応と言うべきものなのかということに絡む問題である。実のところ、前節では、両者の間にあまり厳密な線引きをせず、両者を引っ括めて視線追従の発達を概説したのだが、幼い子どもが頭部回転や指さしなどとは独立に目および視線だけから正確な他者の注意の方向検出が可能かどうか、あるいはそれが可能になるのはいつ頃なのかといったことについてはいまだ議論が錯綜しているというのが現状である。

基本的に、少なくとも生後1年目における乳児の他者の方向変化に対する反応は、純粋に視線の動きのみでは生じ得ないようである。他者の視線ではなく、むしろ、多くの場合、それと連動する、より顕在的な頭部回転を手がかりにして、乳児は他者の注意方向に自らの視線を向け得るものと考えられる(e.g. Butterworth & Jarrett, 1991; Corkum & Moore,1995)。例えば、生後9カ月児においては、目の開閉にかかわらず他者の頭部回転だけに反応した視線移動が認められるという。見解の相違が認められるのは、この後の視線読み取りに絡む発達プロセスである。

1つの立場は、生後2年目のかなり早くから、子どもは他者の注意の対象を特定するのに視線を中核的手がかりとして用い得るようになるというものである。例えば、バトラーら(Butler et al.,2000)は、他者の視線を不透明なスクリーンで遮る条件とスクリーンなし条件およびスクリーンに透明な窓がつき視線が対象に届く条件と比較検討し、14カ月児ではまだその結果は一貫していないが、18カ月児になると、不透明スクリーン条件よりも、スクリーンなし条件と窓あり条件で有意に他者の視線追従を行うようになることを見出し、何かを見、指し示すものとしての目および視線の理解がその時期に成り立っている可能性を示唆している(ちなみにキャロンら[Caron et al.,2002]は14カ月児で同様の知見を得ている)。また、ウッドワード(Woodward, 2003)は、7,9,12カ月児を対象に、演技者が顔を動かし2つの玩具の内の1つを見る状況に乳児を馴化させ、その後、(a)同方向を見るがそれまでとは違う玩具を見る条件と(b)反対方向を見るがそれまでと同じ玩具を見る条件のどちらで脱馴化が生じるかを検討している。それは、12カ月児においてのみ、(a)条件で脱馴化が生じることを見出し、7,9カ月児のように、視線追従が可能であることが、視線およびそれを送る人とその視線の対象との関係を理解することと連

動したのではないということと同時に、9 から 12 カ月にかけて子どもが、視線とその対象との特異的関係を理解し始める可能性を示唆している。さらに、ブルックスとメルツォフ(Brooks & Meltzoff,2002)は、12,14,18 か月児を対象にした実験において、既に 12 カ月段階から、子どもは他者が目を開いている場合によりそのターゲットとなっているものを注視すること、また 14,18 か月児では、他者が目隠しをしている時よりもヘッドバンドを頭に巻いている場合に、より多く、そのターゲットとなっているものを見ることを見出し、生後 2 年目の前半には、乳児は他者の視線をある対象に向けられたもの(object-orientedness)として解釈し得るようになる結論している(明確な頭部回転が存在していても、そこに視線が絡まなければ子どもは他者の注意方向に気を止めなくなる)。そして、この背景に、目を開けていることの心理学的意味が、"私と同じ"投射メカニズム(like-me projection mechanism: Meltzoff,2002)、すなわち自身の目を開けた状態での経験が他者にも同様に生じているとア priori に想定してしまう傾向によって、この時期に獲得されるのだろうと推察している。彼らによれば、子どもはこの時期に他者の注視に自らの指さしを伴わせることが多くなり、またその注視対象を長く凝視するようになるが、このことは、他者の見ているものが乳児の中で特別な意味を持ち始めているということの証左であろうという。

その一方で、他者の注意方向の理解において、視線が特権的な役割を持ち始める時期をもう少し後に仮定し、なおかつその発達プロセスをよりゆるやかで漸進的なものと考える向きもある。例えば、コーカムとムーア(Corkum & Moore,1995)は、生後 18 カ月段階になると、確かに頭部回転と視線が合わさった時に、頭部回転だけの時よりもその他者の注意方向への視線移動のパフォーマンスが上がることを見出しているものの、生後 2 年目においても視線のみの手がかりでは正確な定位は基本的に困難であろうとしている。また、ドハティら(Doherty & Anderson,2000)は 2~4 歳児を対象に、絵中の人物が何を見ているのか、あるいは絵中の 2 人の人物のうちその対象児を見つめているのはどちらか判断させる実験を行い、2 歳児と 3 歳児前半の群では、その 6%しか両課題を通過できなかったこと、それに対して指さしを手がかりにすると同年齢群の 70%の子どもが両課題に通過し得たことを報告している。なお、3 歳児後半と 4 歳児では、そのほとんどが両課題を通過し得るようになり、また実験者が絵中の何を見ているかを判断させる課題においても、3 歳児は 4 歳児よりもそのパフォーマンスが圧倒的に劣ることから、ドハティらは、3 歳前に視線のみから他者が何を見ているかを正確に判断することは困難であり、それ以降になって子どもは徐々にその能力を身につけるのだとしている。さらに、リーら(Lee et al., 1998)は、基本的に子どもは 2 歳頃から既に視線の活用は可能であるが、それは、多くの場合、同時生起する頭部回転や指さしなどの他の手がかりに支えられていると考えている。彼らによれば、3 歳児でもまだ他者の欲求の対象を特定する際に、視線よりは指さしや頭部回転に頼るところが多く、視線のみから他者の指示対象を特定し得るようになるのは、上述したドハティらと同様で、4 歳前後になるのではないかという。

おそらく、子どもの視線読み取りはある時期を境に一気に完成形の様態をとるような性質のものではなく、より漸次的に構成されるものなのであろう。繰り返しになるが、私たち一般が経験する日常的な状況においては、他者の注意の移動に、視線だけではなく、頭部回転や身体姿勢の変化はもちろん、指さしなどの様々な手がかりが随伴し、しかもそれらの間には整合的な関係が成り立っている(それぞれの方向がずれるようなことは例外的である)ため、発達早期、子どもはそれらを、それぞれ個々独立にではなく、包括的・総体的に活用しているのかも知れない。別の言い方をすれば、生後 1~2 年目においても確かに時に視線追従は生じ得るが、それは必ずしも安定したものではなく、むしろ、それ以外の利用可能な方向性の手がかりが多くなればなるほど、また、顕在的になればなるほど、子どもの、他者に合わせた注意移動のパフォーマンスは高まるということになるのだろう(Deak et al.,2000)。ちなみに、上でもふれたリーら(Lee et al.,1998)は、視線理解に関わる発達プロセスに"連合プロセス"(association process)と"分化プロセス"(differentiation process)という 2 種のもの存在している可能性を提示している。前者は、その種類にかかわらず、他者が発する(視線を含めた)方向性の手がかりを、自分の注意が向くべきところを示すポインターと見なし、それが、さらに単に対象ということではなく、その対象とそれに注意を向ける人との関係を示すものであること、ひいてはその人の見えない心的状態と連合するものであることを理解するに至るプロセスのことである。それに対して後者は、そうした方向性の手がかりと他者の注意対象およびそれに対する心的状態との連合を、より精度高くチューンアップするものであり、初めはほとんど一体のものに見なしていた

手がかり群を漸進的に分化させ、徐々に少ない手がかりでも、また視線のようなより非顕在的な手がかりだけでも、それが発生した状況との絡みで、人の複雑な心的状態を読み取り得るようになるプロセスのことである。子どもにおける視線読み取りの発達の底流には、こうした二重のプロセスが並行的に走っており、そして、それは、視線と、他の方向性の手がかりおよび種々の文脈の手がかりとの関係性がいかなるものであるかの理解の深まりとして把捉し得るものなのだろう。

例えば、指さしという手がかりは乳児にとってきわめて顕在的で、なおかつ早くから活用しやすいものかも知れないが、それは乳児に配慮し、何ものかを伝達しようと意図する他者の存在を前提にして初めて生じるものである。それに対して視線は、密やかではあるが、他者が乳児に配慮しようといまいと、それは確実に自然と外に漏れ出るものとしてある。指さしが発する情報が他者の伝達意図に依存するきわめて限定的なものであるのに対し、視線が発する情報はある意味、人がいるところであればどこにでも遍在するものであり、ひとたび、乳児がそれを活用し得るようになれば、乳児は他者によって周到に与えられたものばかりではなく、自発的に様々な他者から、そして世界から多くの有用な事柄を収集し得るようになり、その学習可能性は飛躍的に増大するものと考えられる。しかし、それは発達早期からそこに既に備わったものとして在るのではなく、相応の時間をかけて準備されなくてはならない性質のものである。

視線理解と原初的な「心の理論」 - 目はいつ頃に心の窓となるか? : ここまでの問題は、視線が放つ情報とそれ以外の身体が発する情報とを乳児がいかに弁別的に活用し得るようになるかということに関するものであったが、これにも密接に絡むもう1つの問題として、視線追従や共同注意が可能になることと、その心理学的意味を理解することとの関係をいかに捉え得るかということがある。すなわち、視線追従や共同注意の事実が、即、視線の送り手が特定対象とある心理学的関係を有している（他者は何らかの意図を持って特定のものをしている）ことを子どもが理解しているということの証左とは言えず（それは例えば半ば自動化された反射的な視覚定位の範疇で考え得るものかも知れない）、そうだとすれば、そうした理解の成立はいつなのか、どのような判定基準をもってその時期を特定し得るのかという問題である (e.g. Flavell, 2004)。

この問題をめぐる一方の極は、いわゆる「心理学者」(mentalist)と呼ばれる立場であり、ここでは、少なくとも、生後1年目の後半に生じる共同注意をもって、乳児が既に見ることの心理学的意味を理解していると見なされる (e.g. Baron-Cohen, 1989, 1995; Bretherton, 1991; Gopnik & Meltzoff, 1994; Hobson, 1990; Tomasello, 1995)。人の注意は、直接、ある対象に対して物理的な影響をもたらすものではない（視線を送っても対象は不変のものとしてそこにあり続ける）。従って、当然のことながら、客観的に知覚される外的変化を通じて、主体と対象との関係を知ることはできない。そして、その潜在的な関係を知り得ない限り、乳幼児が、少なくともその関係の意味に沿った適切な行為（例えば養育者と同じものを見てにっこりと微笑するなど）を起こし得るはずはないというのである。トマセロ (Tomasello, 1995) によれば、他者の視線とその対象に特別な関心を寄せる共同注意の現れは、原理的に、乳児が、他者が自分と同様に目とそれによって特定対象に注意を払う視覚的能力を有しており、またそれと同時に自分とは異なる意図を持ち得る存在でもあることに関する原初的な気づきを有しているということを含意しているという。もし、こうした見解を採るとすれば、共同注意は、潜在的な「心の理論」(implicit theory of mind; Bretherton, 1991)、あるいは少なくとも「心の理論」の先駆体 (precursors of theory of mind; Tomasello, 1995a, 1995b) に支えられて初めて成立するものだとも言える訳である。

これに沿うものとして、例えば、ジョンソンら (Johnson et al., 1998) の研究を挙げることができるかも知れない。それは、生後12カ月の子どもでも、自らと随伴的な相互作用をする人や顔を有する人形などを選んで方向追試しようとすることを明らかにしたものであるが、この知見は乳児が他者を「意図を有する主体」(intentional agent)（自分と何か関わりを持ってくれそうな存在）であると認めた時にのみ、その視線をモニターするのだと解釈し得るものであり、視線追従の背後には既に何らかの意図性を介在を伺わせるものとなっている。また、トマセロとハバール (Tomasello & Haberl, 2003) によって行われた実験は、子どもと2人の大人が2つの玩具を用いて相互作用した後、1人の大人がその場を離れ、その間に新しい第3の玩具が導入され、子どもはそこに残った大人とそれを用いて相互作用するという状況を作る。そして、その場を

離れていた大人が戻ってきて、（位置的に近い場所に置かれた）3つの玩具の方を見て、「ワー」「それ貸して」などと声を上げた時に、子どもが戻ってきた大人の注意の対象がどれであることを識別させるということを試みている。その結果は、12カ月児でも、その識別は基本的に可能であり、彼らが既に、戻ってきた大人が新しいものに注意を向け、興奮していることを理解しているということ、別の見方をすれば、自分にとっては新しくないにも関わらず他者にとっては新しいということを理解しているということを示唆するものとなっている。トマセロらは、この結果を受けて、1歳児は他者を"意図を持ち注意を払う主体"(intentional and attentional agent)として理解している可能性がある」と結論している。

こうした見解に対して、それを訝り、心的理解を基礎としない視線追従や共同注意の萌芽・成り立ちの可能性を訴える非心理学者(non-mentalist)も少なくはない(e.g. Corkum & Moore,1995; Langton et al.,2000; Moore,1999; Moore & Corkum,1998; Perner,1991; Povinelli,2001; Woodward,2003)。例えば、先にも見たようにウッドワード(Woodward, 2003)は、生後1年前後に既に乳児が視線追従およびそれと対象との関係を理解している可能性を示しているのだが、彼はその解釈に心的理解を絡ませずに、乳児は単に視線に結びついた行動上の規則性(人の見る行為が、指さし、接触、言語的ラベリングなどと共起し、ある特定対象にスポットライトを当てる)を早期段階に理解するに至るのだとしている。また、ムーアら(Corkum & Moore,1995; Moore,1999; Moore & Corkum,1994)は、ペルナー(Perner,1991)の表象発達理論などに依拠しながら、原初的な「心の理論」が共同注意を可能ならしめるというよりも、むしろ、あくまで行動としての共同注意の生起が先にある、それが徐々に原初的な「心の理論」を生み出すという因果の方向性を想定すべきであると主張している。ペルナー(1991)によれば、発達早期の乳児の行動は、基本的に現実に関する"単一の"表象あるいは心的モデルに支配されており、またそうした表象は、新情報に関する処理が行われる度に次々と更新されていく性質を有しているという。同時に2つ以上の表象を有し、それらの間の比較などを通じて、複雑な情報処理をなし得るようになるのは、早くとも生後2年目の後半以降になるらしい。ムーアらは、こうした発達早期における表象処理の制約を考えれば、例えば、自己と他者の両方がある対象に対して同時に注意を向けていること、あるいは意図や欲求といったある心理的スタンスを有していることを、一度に表象することはまず不可能であり、その意味で、生後1年目の段階から現実に観察される共同注意などが、原初的な「心の理論」に支えられて生じているとは考えがたいと推察するのである。彼らによれば、子どもは発達の早期段階から既に、先に見た反射的的定位メカニズム、あるいは道具的学習(オペラント条件づけ)および遊びなどを通じた養育者等によるトレーニング(Bakeman & Adamson, 1984)によって、他者の視線の方向に、(他者の心的状態としてではなく、あくまでも子ども自身の直接的経験として)"何かおもしろいもの"がありそうなことを"結果的に"知ることになり、それが時に共同注意や社会的参照を可能ならしめるのだという。例えば、条件づけの考え方に従えば、他者の頭部回転に合わせて、たまたま同じ方向を見た時にかなりの確率でおもしろいものあるいは快的なものなどが発見されるという経験の蓄積を通して、結果的に他者と同じものに注意を向けること、すなわち共同注意が定着していくというようなことである(現にコークムとムーア[Corkum & Moore,1995]は、それまで自発的に共同注意を起こしたことの無い乳幼児が、一連の条件づけを通じて、共同注意を示し得るようになることを確かめている)。

もっとも、この非心理学者が否定するのは共同注意などの成り立ちがその時点で既にある原初的な心的理解(他者の視線は、その他者の特定の対象に対する、意図や欲求といった何らかの心理的スタンスを示すものであるという理解)を礎にして在るという点であり、子どもが発達過程の中で"やがて"視線から心を読むに至ることを否むものではさらさらない。ムーアらは、当初、道具的なものとして在る発達早期の共同注意の経験の蓄積によって、そしてまたそれに随伴して生起する乳幼児自身の内的・心的経験を通じて、生後18カ月以降になって初めて子どもは、視線の指示的性質を理解し、見ることに"心"が絡み得ることを覚知し始めるのだろうとしている。ある研究(Lempers et al.,1977)は、子どもが自分が今見ている絵に対して、手で目を覆っている大人から「それ見せて」と言われた時の反応を検討しているが、それによれば、子どもが大人の手を目から払いのけて、大人に絵が見えるように働きかけ始めるのは、早くとも生後18カ月以降であり、やはり、このあたりが、目や視線が何ものかを見る、何ものかが見えるという内的経験を伴うことでの理解の成立において重要な分岐点である可能性が窺えるのである。また、オニール(O'Neill,1996)は、2つの入れ物の1つの中に落ちたステッカーを子どもが



再び取り出そうとするという実験状況（乳児1人では手が届かず取り戻すことは不可能）において、養育者がその時に目を閉じていてどちらの入れ物にステッカーが落ちたかを見ていないと、2歳児は養育者が目を開けている場合に比して明らかに多くのジェスチャーを示し、養育者にステッカーの在処を教えようとするということを見出している。これは、これくらいの年齢の乳児が、見ていないことがその事柄に関する知識や情報を持たないということを知っており、その個人の心的状態として不足している情報を、子ども自らが補おうとする所作であると解釈できるかも知れない。

以上見てきたように、心理論者と非心理論者の基本的対立点は、換言するならば、どの時点から、子どもの視線追従や共同注意が心的理解に絡むものになるのかというものであり、その時点の特定はいまだ十分になされていないと言うべきである。ただし、フラベル(Flavell,2004)は、これまでの膨大な研究知見を総括して、乳児が18~24カ月くらいまでに、視線に絡む基礎的知識を獲得するに至るのではないかと主張している。すなわち、他者の視線は何ものかについてその他者が能動的に起こしたものであり、他者が何かを見ている時に、その他者の内部で何かが生じていること、世界についての情報を受け取り、視覚およびその他の主観的経験を有していること、さらには子どもが他者と相互作用している時に他者が発する発話や情動およびその他の行動は他者の視線に密接に関係するものであることなどを、子どもが生後2年目の後半から3年目にかけて徐々に理解するようになるというのである。視線に絡む諸行動と心的理解の相互関係については今後も熱い議論が予測されるが、本論ではひとまず、このフラベルの主張を暫定的な結論としておくことにしたい。

### 3-3) 視線と情動表出の密なる関係：情報の与え手としての養育者の役割を絡めて

原理的に視線理解の延長線上に位置付き、それとほぼ同期連動して発達する興味深い行動に"社会的参照"(social referencing)がある(e.g. Campos et al.,1985)。それは一般的に、ある個人が見知らぬ人やものなどに遭遇した際に、他者の視線が自分と同じくそれらに注がれていることを確認した上で、他者の表情を手がかりに、それらのものの意味を判断し、それらに対する自らの行動を調整するようふるまいを指して言う(遠藤・小沢,2000)。別の言い方をすれば、自己-他者-対象という三項関係における共同注意事態において、そこに随伴する他者の情動表出を活用して、他者が当該の対象に対していかなる心的状態を有しているかを知る行為ということになる(Moses et al,2001;Mumme & Fernald, 2001, 2003; Repacholi,1998)。実のところ視線そのものは他者の意図性がどこに注がれているのか、その所在を伝えるものではあっても、それがどのような心的状態を示すものか、その内実までを示すものではない。他者の視線の先にあるものは、他者にとって親密の情をそそるものでも、敵意を掻き立てるものでもあり得るのである。つまり、視線はその状況文脈によってきわめて多様な意味を担い得るものであり、決して一意的にその意味が定まらないという点において、本質的に、いわば"語用論"の次元でしか語り得ないものと言える。一方、情動は、元来、個体がある事象や対象に対して、その個体の利害関心の観点から、いかなる評価(appraisal)をするのか、その評価の質に対する反応として在る(Lazarus,1991)。逆に言えば、声や顔の表情に漏れ出た情動は、その他者のある事象や対象に対する評価を表すものとして在り、例えば顔の表情が微笑であればそこから他者のポジティブな心情を、反対に、しかめ面であればネガティブな心情を読み取ることができるのである。つまり、各種情動表出は、それ自体がある程度特異的な情報を弁別的に示す、いわば"意味論"の次元で語り得るものであるということである。こうしたことからすると、視線が自己と他者を結ぶ真に有効なコミュニケーション・ツールとしてあるためにはそれ単独では自ずと制約があり、情動表出と組み合わせることによって、その真価が飛躍的に発揮されるものとも言えるのである。すなわち、視線と情動表出の組み合わせとしてある社会的参照を通して初めて、子どもは他者が"何について"、"どんな思い"を有しているかを知ることができるのだということになる。

先に、子どもの心的理解の萌芽が視線読み取りを可能ならしめるというよりも、むしろ、行動としての視線読み取りが先にあり、その経験の蓄積が、視線の背後に潜む心的理解への道を徐々に切り拓くという因果の矢印がより妥当である可能性が高い旨を述べたが、実際のところ、このプロセスにおいてより重要な意味を有しているのは、ただ語用論次元でしか機能しない純然たる視線そのものに絡む諸経験よりも、情動という意味論を伴った共同注意事態、すなわち

社会的参照の機会にどれだけさらされるかということなのかも知れない。複数の論者が、この社会的参照が系統発生的に見てヒトにおいて飛躍的に進化した可能性を指摘し、また、ヒトの子どもが発達早期に、その環境世界について急激な勢いで種々の知識を獲得し、また構造化していく上で際立って有効な学習メカニズムとして機能していると論じている(e.g. Baldwin & Moses,1996; Saarni,1999; Tomasello et al.,1993)。基本的に他者が発する視線と情動の情報にある意味"盗み取る"ことによって成立する社会的参照による学習は、子どもが自ら当事者として、試行錯誤的にある対象や事象との直接的経験を踏むことを、また自らリスクやコストを負うことを原理的に一切必要としないという意味で、きわめて効率的と言えるのである。

もっとも、子どもは、社会的参照という現象が認められるようになる、まさにその時点から既に、他者が発する情報を、あるいは(それを通して)世界に遍在する情報を能動的に取りに行き、また自律的に学ぶ存在では必ずしもないようである。確かに、現象としての共同注意が生起するのとはほぼ同期して、社会的参照は生後1年目の終わり頃から認められるようになるようである(Boccia et al.,1988; Saarni et al.,1998)。1歳を超える頃にはかなり高確率で、大人の情動表出(快不快)を見聞きした直後に、その大人の顔をチェックし、その視線の先にあるものに対して適切な行為をとり得るようになるという(Moses et al.,2001; Repacholi, 1998)。例えば、大人が笑んでいる時には、その対象に近接し、逆に眉間にしわを寄せていればその対象から遠ざかるようとするのである。フィリップスら(Phillips et al.,2002)は、最近、2つのぬいぐるみのどちらかに実験者が顔の表情と発声による情動表出を伴わせて視線を送っているところをまず乳児に見せた上で、その状況全体をスクリーンで乳児に見えなくなるようにいったん隠し、その後スクリーンを取った時に、その実験者が1つのぬいぐるみを抱いているという状況を乳児に提示するという実験を行っている。それによれば、12カ月児は、もともと実験者がポジティブな情動を伴わせて見ていたぬいぐるみを抱くという条件よりも、そうした視線を送っていなかったぬいぐるみを抱くという条件をより長く凝視したという。つまり、ポジティブな感情(親愛の情)をもって見ることと対象となったぬいぐるみに近づきそれを抱き締めようとする行為の連関を12カ月児は既に当然のものとして理解しており、それに対する期待が裏切られた時に、乳児はそれに強く反応したということである。この実験は、乳児が他者の情動に合わせて自らの行動調整を行うということを直接検討したものではないが、こうした結果の傾向は8カ月児にはまだ認められず、フィリップスらは生後1年目前後にかなり明確な社会的参照が生起してくる可能性を論じている。

しかし、近年、"完成体としての社会的参照"が既に生後1歳前後で成り立っているという見方に対して懐疑的なスタンスを採る論者が増えつつある。例えばボールドウィンとモスイズ(Baldwin & Moses,1996)によれば、この時点の子どもは情報のよき"消費者"(consumer)であっても"能動的探索者"(active seeker)ではなく、共同注意態が成り立っている状況で養育者等によってタイミングよく情動表出がなされた場合に、受け身的にそれを活用し得るという水準に留まるのではないかという。さらに彼らは、たとえこれくらいの時期の子どもが見知らぬ人や対象に遭遇した際に養育者等に視線を送ることがあっても、それは自発的に"情報を求める行動"(information-seeking behavior)でとしてではなく、(未知なる対象との遭遇によって生じた)不安や恐れに対する"慰撫を求める行動"(comfort-seeking behavior)として理解すべきものだとしている。換言するならば、最初から情報探索という動機づけではなく、愛着欲求などの別の動機づけをもって養育者を注視した際に、養育者が表出している情動に巻き込まれる形で結果的に社会的参照が生じている可能性が高いということである。ボールドウィンらによれば、子どもが"能動的な情報探索者"になり、真の自律的な社会的参照が具現されるようになるのは、いくらか早く見積もっても生後24カ月以降になるだろうという。

当然のことながら、社会的参照とは本質的に三項関係の問題であり、子どもと同一の対象に注意を注ぐ他者の存在なくしてはいかなる意味でも成り立ち得ないものである。さらに言えば、子どもの視線を敏感に察知し、それに沿った適切な情報をその表情や発声(さらに子どもの発達が進めば言語)等を介して能動的に伝達しようとする養育者等の存在があって初めて成り立つ部分が少なくはないということである。日常の状況において、養育者は、ある対象に対して自分自身、何らかの評価をし情動的に反応するだけではなく、加えて、子どもが自身に向けてきた注視等の潜在的な意図を解釈し(例えば、子どもは何かわからなくて困惑しているのだらうと推察して)、それに応じて、明らかな伝達意志の下、自らの情動表出を操作する存在であると考えられる(例えば、危なくないよということ伝えるために微笑みを作る)。場合によ

っては、養育者自身は、当初、子どもが注意を向ける対象に対して何ら情動的に反応していないかも知れないし、あるいはまた、そもそも子どもの関心がどこにあるかを特別に意識していないかも知れない。むしろ、子どもから注視や発声といったシグナルを受けて初めて、子どもの関心の所在を探し、あるいは推測し、それから子の心的状態を考慮して、その時点で意図的に何らかの情動表出を作るということも多々あるだろう。

ただし、いずれにしても重要なのは子どもに配慮する養育者等の大人による能動的な"社会的入力"(social input)が、早期段階における社会的参照の成否に大きく関わっている可能性が高いということである(遠藤・小沢,2000)。オールデンら(Walden,1991; Walden & Knieps,1996)は、子どもの注視を養育者に対する子どもからのシグナル(信号)であると考え、社会的参照を、そのシグナルと、それに対する養育者の随伴的応答との組み合わせという観点から捉え直す試みをしている。彼らは、健常児と発達障害児の両者において、養育者の子どもの注視活動の受け止め方およびそれに基づいた働きかけによって、子どもの社会的参照の現出・様相・展開が大きく左右されることを見出している。また、小沢・遠藤(2001)は、子どもが新奇な対象に遭遇した際の様子および視線の解釈が、養育者によって大きく異なり、その差異がその後の社会的参照の成否に深く関与する可能性を論じている。さらに小沢(印刷中)は、養育者の子どもの自律性を重んじる傾向(自律期待)を取り上げ、その傾向が高い養育者ほど、実験状況において子どもが養育者に向けた視線を、「あれ、何?」などの情報探索の意味合いを有すると解釈しやすく、またそうした養育者の子どもにおいて、現に、養育者のネガティブな情動表出にされされた時に自らの対象に対する反応をネガティブな方向に変化させやすい(すなわち社会的参照が適切になされ養育者の情動に沿った行動調整が生じた)ことを明らかにしている。当たり前のことではあるが、潜在的に子どもの側に社会的参照の"準備状態"があっても、他者がそれを見落としたり、また自身に子どもが向けてきた注視を問い合わせや参照という意味では解釈しないような場合、そこに"具体的行為"としての社会的参照は完全型としては実現しないのである。少なくとも、発達早期段階における現実の社会的参照は、養育者と子どもとの双方向的な社会的交渉としてあり、また多分に養育者側の巧みな配慮に支えられてあるということに研究者はもっと積極的な関心を向けてよいのかも知れない。ちなみに、小沢・遠藤(2001)は、社会的参照が巻き込まれ型(子どもが一方向的に他者情動に巻き込まれて対象に対する行動を変える)から相互交渉型(子どもの情報探索行動とその子どもの注視点に配慮し適切な情報付与を行おうと意図する養育者等の働きかけとの相互交渉の結果成り立つ)を経て、最終的に自律型(子どもが他者の表情をいわば"盗み見て"それを自己の行動調整に活かす)へと至るといって発達モデルを提示している。

従来、この社会的参照や共同注意も含め、子どもの視線理解に関しては、例えばバロン-コーエン(Baron-Cohen,1995)が主張するEDDやSAMといった生得的モジュールの介在が想定され、それらが成熟に伴い"然るべき時になって"発動し始めるのだということが強調されてきたと言える。そこでは、視線理解が暗黙裡に、あたかも個人"内"に閉じて発達するものと捉えられてきた節がある。しかしながら、既述したように、現実にはそれは、あくまでも自己と他者という個人"間"で生じるものであり、少なくとも発達早期においては、子どもの状態に注意を払い視線や情動を含めた社会的情報を積極的付与しようとする養育者によって、ある意味"周到に築かれるものだ"ということを経視してはならないだろう。竹下(印刷中)は、ヒトの乳児が母親の視線を浴びながら育つ存在であることを強調し、子どもが、母親の抱く、授乳する、見る、手渡すといった様々な働きかけを受け入れながら(子どもの側からすれば様々なことをされながら)、自らの能動性と調整してさらに相手に働きかえしていく過程こそがヒトにおいては際立っており、これこそがヒトの進化において視線理解の発達が促進された鍵ではないかと論考している。当初、ただ反射的あるいは道具的なものとしてある視線追従がやがて心的理解を基礎にしたものに徐々に変貌していく過程において、こうした情報の与え手としての養育者およびその養育者と子どもの密接な相互作用の役割は従来考えられてきた以上に大きいものと考えられる。

### 3-4) 視線理解と「心の理論」および言語発達

上述したことは主に視線理解そのものの発達に絡む事柄であったが、もう一つの重要な論点に、それが子どもの他の側面の発達にいかなる意味を持ち得るかということがある。元来、殊

に共同注意に関しては、それが問題にされ始めた当初から、その言語発達（語彙の獲得）に及ぼす重要な働きが指摘されてきた(e.g. Scaife & Bruner,1975)。既にふれてきたように、共同注意とはいわば子どもと他者によるトピックの共有であり、そこにタイミングよく他者による名付けがなされた場合に、子どもはその共有された事物や事態にその名前を1対1対応でマッピングすることができ、そしてそのことが子どもの迅速で効率的な語彙獲得を支え得るというのである。現に、8-14カ月の子ども60人を対象にした、最近のある研究は(Slaghter & McConell,2003)は、その時期における他者の視線に対する追従が語彙の産出と有意な関連性を有することを明らかにしている。また、生後2年目における共同注意と言語発達との関連を見た別の研究(Mundy et al.,2003)は、14カ月段階の共同注意の能力が、24カ月段階の言語発達を予測するという結果を得ている。

視線理解と言語発達との関連性に関して、近年、注目を集めていることに、乳児は、いつ頃から特に話者の視線の先の対象に注意を向けるようになるかという問題がある。これは換言するならば、子どもが話者の視線を察知し、子どもの側から自発的に、その視線の先の対象に自身の注意を沿わせようという形の共同注意の発生に絡む問題ということになる。当然のことではあるが、他者によって何か、言葉が発せられた時に、その言葉を、話し手である他者ではなく、聞き手である自分が注意を向けるものに対応づけてしまった場合、そこで、正確な能記（意味するもの）と所記（意味されるもの）の関連性が学習される確率はきわめて低くなる可能性が想定されよう。例えば、子どもがある果物に注視している状況で、ある乗り物を見ている母親がブーブーと発話した際に、その子どもがブーブーという言葉を見ている果物に関連づけた場合には、当然、誤った学習が生じる確率が高いということになる。大概の場合、言葉は、あくまでも話し手の注意の先にある対象に対して発せられるのであり、子どもがこの暗黙のルールを理解し、このルールに則って行動することは、正確な語彙の獲得に非常に重要な意味を持つものと言える。これまでの研究(Baldwin & Moses,1994;Moore et al.,1999)は、生後2年目の少なくとも後半くらいから、子どもはこのルールに従ったふるまいを多く見せるようになることを見出し、このことといわゆる"語彙の爆発的増加"と呼ばれる現象が同期連動して生じている可能性を示唆している。

視線理解との関連が問題にされるもう1つの事柄は、それが「心の理論」の発達にいかに関与を及ぼすかというものである。既に、述べてきたように、視線理解そのものがある意味、"原初的な心の理論"あるいは"心の理論の先駆体"と位置づけられる訳であるが、ある一群の研究者らは、視線理解のパフォーマンスといわゆる誤信念課題(Wimmer & Perner,1983:人は現実とは食い違う誤った信念、思いこみを持っている時に、その誤った思いこみに従って行動するということの理解を問う)等によって測定される「心の理論」のスコアとの直接的関連性を検討している。繰り返し述べてきたように Baron-Cohen(Baron-Cohen,1994,1995)は、意図検出装置(ID)と視線検出装置(EDD)から注意共有メカニズム(SAM)の構成を経て「心の理論」モジュール(ToMM)の成立へと至る理論モデルを設定していた訳であるが、その先行する EED や SAM 等が、現実に ToMM に対していかなる関連性を有するのかを実証的に問おうというのである。例えばウエルマンら(Wellman et al.,2004)は、18人と小サンプルではあるが、生後14カ月段階の社会的注視の理解が、4歳時点における「心の理論」課題の成績をいかに予測するかについて縦断研究の成果を発表している。そこでは、子どもは14カ月時に、他者が2つあるものの内の1つだけを喜びや興味の感情をもってじっと見るという場面を繰り返し呈示され、その場面に馴化させられる(馴れの結果、飽きて徐々にその場面に関心を向けないようにさせられる)。そして、その後、その同一他者が、2つの内の自分が見ているものに手を伸ばすという条件か、見ていないものに手を伸ばすという条件のいずれかを呈示される。視線は人の関心の所在を指し示すということが理解できていれば、前者の条件は、当然予測される事態ということになるのに対し、後者の条件はその予測に反するものということになる。つまり、この実験は、先行事態と合致しない後続事態で脱馴化が生じるか(その期待に反する事態に対して"あれ、おかしい"と感じ、再び関心を回復させ、それをじっと見ようとするか)を吟味するというものである(この脱馴化が生じれば、その子どもは、先行事態に含まれていた、人の視線がその関心の対象に向かうということを理解できているということを示す)。実のところ、この脱馴化の成績そのものは4歳時点の「心の理論」課題のスコアを予測するものではなかった。しかし、馴化の素速さ、すなわち他者が喜びや興味をもってある特定対象を見るときに何回も繰り返し見せられるとすぐに飽きてそれに注意を向けなくなってしまうという傾向

(これは暗に子どもが日常的にそうした場面をごく当たり前の状況として見、また視線と関心対象との対応について理解しているということを示唆する)は、4歳時の「心の理論」課題の成績を予測するものであったのである。同様の結果はチャーマンら(Charman et al.,2001)の13人の子どもの発達を追った縦断研究によっても得られている。その結果は、生後20カ月段階の共同注意のパフォーマンス(三項関係状況で大人と対象物の間で視線を行ったり来たりさせるか、あるいはターゲットがややあいまいな状況で大人の視線をどれだけ確認しようとするかなど)が44カ月段階の「心の理論」課題の成績に関連するというものであった。

しかし、こうしたプロスペクティブなデザインではなく、同時相関的に視線理解と「心の理論」のパフォーマンスを探った、ある研究(Pellicano & Rhodes,2003)は、「心の理論」の発達における視線理解の特権的役割についてやや解釈の難しい結果を得ている。それは、3,4歳児を対象に、まず、顔の読み取り課題(視線の向きから心的状態を推測させる)と誤信念課題を行い、前者に成功しないで後者に成功する子どもはいないということを見出し、その意味からすれば、視線理解が心の理論の発達に先行するという仮説を支持する結果を得ていると言える。加えて、この研究では、誤信念課題自体の中に視線の手がかりを盛り込み、それがその課題成績に促進的に働くかどうかについても検討している。元来、誤信念課題では、例えばサリーとアンという2人の登場人物がいる状況で、サリーがどこかに出かけている間に、アンが、サリーが出かける前にしまっていったお菓子を、別の場所に移し換えてしまうという例話をビデオなどを使って子どもに聞かせ、その後で、その子どもに、太郎が帰ってそのお菓子を食べたいと思った時に、どこを探そうとするのかを問おうとするのだが、この研究ではさらに、サリーが帰ってきた時にその視線を元々置いていった場所に向けてということまで示すのである。しかしながら、この視線の手がかりは子どもの誤信念課題の成績を引き上げることはなかった(サリーがその思いこみに従って、元々置いて行った、しかし今現在はもうお菓子が存在しない場所を探すという正答の比率を引き上げない)。この研究者らは、この結果を受けて、3,4歳の子どもでもなお、視線から他者の心的状態を読み取ることができないという状況が多々あるのではないかと推察している。

視線理解に関してはその早期段階の個人差を扱った研究がまだまだ稀少であり、それが後の種々の発達にいかに関わるかについては慎重に議論を行うべきであろう。しかし、上述したような研究知見は、潜在的に、発達的に先行する視線理解の成立が言語や他者の複雑な心的状態の読み取り等に深く関与する可能性を示唆しており、今後のさらなるデータの蓄積が大いに期待されるところとなっている。

#### (4)視線読み取りに絡む発達障害：自閉症

前節の(3)では、視線理解の基準的(normative)な発達ラインを示し、それが自己と他者の心の読み取りに持ち得る意味について概観した訳であるが、そこには当然、広範な個人差の存在が想定される。目や視線に対する敏感性を相対的に欠き、それらの心理学的意味の理解に独特の困難さや遅滞を呈する個人も少なからず存在し、その原因論や臨床的介入の方法などについて様々な議論がなされている。特に、現今の発達臨床心理学あるいは発達精神病理学等においては、視線理解とそれに関連する「心の理論」の特異性ということに絡む典型的な発達障害として、自閉症に多大な関心が寄せられている。

1980年代の半ば頃から、複数の論者(e.g. Baron-Cohen,1989; Leslie,1987; Loveland & Landry,1986; Mundy et al.,1986)が、自閉症児には特有の共同注意の障害があり、そのことが、その後の「心の理論」の発達不全を招来するのだという可能性を論じてきた。とりわけ、バロン-コーエン(Baron-Cohen,1995)は、自閉症児が、人の目がある特定対象に向いていることを理解し得ても、「Aさんが〇というものに注視していることをBさんが見ている」といった、高次の三項関係表象の形成に必要な"注意共有メカニズム(SAM)"を欠いていると断じてきた。確かに、自閉症児における共同注意の発現は健常児や他の発達遅滞児に比して際立って遅く、生じたとしてもその生起頻度はきわめて少ないこと(e.g. Dawson et al.,2004;Lewy & Dawson,1992)、微笑等の情動を伴うことが稀少であること(e.g. Kasari et al.,1990)などが確認されている。大神(印刷中)は、殊に自閉症との連続性が疑われる臨床域の乳幼児において、指さし理解や指さし産出を含めた共同注意スキルの水準が高くなるほど、その発達の遅れがより顕著になることを明らかにしている。また、自閉症児でも、就学以後、言語も含めた知的能力がある程度伴ってくると、

かなりのところ、自発的な視線追従を特にターゲットがない状況でもなし得るようになるが、その時期は、一般の子どもあるいは発達障害児がそうした知的水準に到達するはるか以前からそれが可能であることを考えるときわめて遅く、彼らの共同注意が SAM などの特化した認知的基盤によって支えられているというよりは、一般的な繰り返しによる学習の効果なのではないかということも指摘されている(Leekam et al.,1998)。別府(印刷中)も、トラヴィスとシグマン(Travis & Sigman,2001)を引きながら、たとえ自閉症児が外形的には一見、健常児とほぼ同様に共同注意に絡む諸行動を成立させているかに見えても、実のところ、それは"汎用型学習ツール"(general-purpose learning tools)なるものによって辛うじて支えられている可能性が高いのではないかと論じている。さらに、別府(印刷中)が指摘するように、自閉症児が時折、見せる共同注意およびそれに関連する指さしなどの諸行動はいわゆる"原要求的"(proto-imperative)なもの["あれ欲しい"、"これがいい"]といった自らの要求を実現するために、指差しなどの非言語的手段を用いて他者の視線を自分の目当ての対象に向けようとするふるまい]が大半を占め、"原叙述的"(proto-declarative)なもの[驚きや感嘆といった様々な心的状態を伝達すべく、自分が関心を寄せる対象にただ他者の注意を向けようとするふるまい]はほとんど認められず、自閉症の子どもにとっての共同注意は、まれに生じたとしても基本的には道具的であり、他者との社会的親和関係の確立・維持のために用いられることがきわめて少ないということも明らかにされている(e.g. Charman et al.,1998; Kasari et al.,1990)。

ちなみに、前節でも述べたように、通常の子どもは、生後2年目の少なくとも後半には、何らかの言葉を耳にした場合に、その言葉を、聞き手である自分の視線ではなく、話し手である他者の視線の先にある対象と結びつけて理解しようとするのだが、自閉症児には一般的に、こうした傾向が希薄らしい。例えば、バロン-コーエンら(Baron-Cohen et al.,1997)は、7.7-12歳の自閉症児と同じ年齢帯の知的障害児および自閉症児群と知的レベルを揃えた20-30カ月の健常児を比較し、正確に話者の視線と言葉との対応づけを行った子どもの比率が順に29.4%、70.6%、79%であり、自閉症児が一般的に耳にした言葉を自らの注視対象に誤って対応つけてしまいがちであることを報告している。このことは、自閉症児が、相対的に、三項関係状況における他者の目の心理学的重要性を理解しておらず、話者の視線を話者の指示の意図とはあまり結びつけ得ないことを示唆し、こうしたメカニズムの歪みが、自閉症児特有の一症状である言語的コミュニケーションの発達遅滞や障害に深く関与している可能性が否めないところとなっている。

このように自閉症児の視線読み取りの本源的な特異性を、三項関係状況における共同注意メカニズムの中に見出していこうとする動きに対して、自閉症児にはより発達早期から注意のコントロール・システムそのもの、先述した術語で言えば"反射的視覚定位"(reflexive visual orienting)のメカニズムなどに根本的な問題があり、そのことが結果的に後の共同注意の発達不全にも通じ得るのではないかという考えがある。一般的に、乳児は生後2~3カ月の間、中心視野にある対象に注意を向けている時に、周辺視野に別対象を提示されても、それに注意を向け変えるということに困難を示す(Atkinson et al.,1992)のだが、4~6カ月段階にもなると、こうした状況における注意の素早いシフトが可能になると言われている(Hood,1995; Johnson et al.,1994)。しかし、自閉症児においては、こうした発達に障害や遅滞があり、自身の現在の注視点に固着してしまう結果、他者の目や視線に移動が生じても、それに連動して自身の注意を移し換えることができず、そのことがその後の一連の視線読み取りの発達に阻害的に働くというのである(e.g. Burack et al.,1997)。しかしながら、リーカムら(Leekam et al.,2000)によって行われた実験は、むしろこうした可能性を訝るものになっている。それによれば、自閉症の子どもは、中心視野に刺激が現れた後で、周辺視野の別刺激が現出する状況で(中心視野の刺激がすぐに消失しても、そのまま残存しても)、迅速に新刺激に注意をシフトさせることができ、そのパフォーマンスは、精神年齢を揃えた自閉症以外の発達遅滞児よりもむしろすぐれる傾向にあったのである。このことは、彼らが少なくとも、物理的な視覚刺激の現出に反応して注意を焦点化する"外生的"(exogenous)な注視移動には特に問題がないことを意味し、彼らの視線読み取りの障害は、別種の要因に起因すると考えざるを得ないことになる。ちなみに、Senju et al.(2001)も、健常児と自閉症児を対象に同様の実験を行い、このように自動的・反射的に立ち上がるような注意のシフトでは、両者にほとんど差異が見出せないことを明らかにしている。

実のところ、上述したリーカムらはその同じ研究の中で、自閉症児が三項関係状況における視線追従に問題を抱える(実験者の頭部回転に即座に反応した自閉症児は20%で、他の発達遅



滞児は 65%)ということに加えて、彼らがまた、自己と他者という二項関係状況において、大人から注意を引くような働きかけ(大人がじっと子どもを見つめる、名前を呼ぶ、こっち見てと言うなど)を受けても、その反応性が圧倒的に劣るということを見出している。そして、この一連の結果を受けて、リーカムらは、自閉症児の本質的な問題はより原初的な注意の移行システムではなく、また、特異的に三項関係状況における注意共有メカニズム以降の障害ということでもなく、むしろ、二項関係状況において、人の発する種々の社会的刺激が、彼らが本来有しているはずの反射的的定位システムを作動させない(物理的刺激的現出には反応しても、人の行為にはあまり反応しない)ということであり、そして、その二項関係に絡む問題が三項関係状況における共同注意を困難にしているのではないかと推察している。

このように、近年、自閉症児においては反射的な定位そのものについては問題がない(Neely,2001;Okada et al.,2002;Senju et al.,2001;Swettenham et al.,2000)が、二項関係において、相互注視も含めた情動的・社会的交流にある種の特異性があるということを重ねる論者が増えつつある(e.g. Dawson et al.,1998; Hobson,1993,2002)。また、現に、回顧的手法を用いた、かなり多くの実証研究が、後に自閉症児と診断される子どもが、乳幼児期において人の顔を見る時間がきわめて少なく、どちらかと言えばそれを避けているようでもあり(Osterling & Dawson,1994; Swettenham et al.(1998)、また養育者等の対面的な相互交流状況でのアイコンタクト(Buitelaar,1995; Volkmar et al.,1986; Volkmar & Mayes,1990)あるいは情動表出を伴うその頻度がきわめて乏しく、自閉症児の養育者は一般的に彼らの注意を引くために、軽くたたいたりするなどの身体的刺激を多く与えなくてはならなくなるということを示している(Joseph & Tager-Flusberg, 1997)。さらに、ある研究(Pierce et al.,2001; Schultz et al.,2000)によれば、自閉症児では、通常の人々が顔を認知する際に賦活する脳部位の活動が低下しており、逆に通常の物体認識で賦活する脳部位が顔処理に用いられている形跡があるのだという。自閉症児においては、おそらくアイコンタクトや相互注視が、通常の子どものように特別に魅力あるものではなく、すなわち種々の情動や心的状態の交流を可能にするものにはなっておらず、それ自体の確立・維持が、メカニズム的にも動機づけ的にも困難であるということが、その他者の視線が二項関係状況の外側に在る第三項に移行した際の、彼ら独特の無反応(すなわち共同注意の発達不全)あるいは心の窓としての目の活用の乏しさに通じ得るのかも知れない。この点に関して、ベーコンら(Bacon et al.,1998)が得た自閉症児の社会的参照に関する知見はさらに示唆的と言える。彼らは、意味のあいまいな発声を聞かされた際に、知的水準の高低に関わらず(高機能、低機能いずれにおいても)、健常児、精神遅滞児、言語発達障害児に比して、周囲にいる大人に対して社会的参照を行うことが圧倒的に少ないことを明らかにし、この社会的参照、すなわち他者からある対象に関する意味を引き出すことの困難さが、自閉症という障害の中核的特質の一つとなっており、それが「心の理論」の特異性とも通底している可能性を論じている。彼らによれば、自閉症児においては、他者との情動的な相互交流に欠かせない情動調律(affect attunement)や情動知覚の問題がより本質的なリスク要因としてあり、それらが、社会的参照の少なさを招来し、そしてひいては「心の理論」の発達にも阻害的な影響をもたらすのだろうという。

以上、概観してきたように、自閉症の視線理解およびその発達の特異性に関しては急速に研究が進みつつあるか見える。しかしながら、早期スクリーニングなどの臨床実践の場から見れば、3歳未満において自閉症を発見できる見込みはまだまだ低く、まさにそれは「干草の中から針を探す」くらいに難しいというのが現状なのである。 Baron-Cohenを始め、複数の研究者(Baron-Cohen,1992,2001;Filipek et al., 2000)が、視線理解に関わる項目を中核とする、自閉症の先駆的な早期診断スケールを案出しているが、現在のところ、その精度は必ずしも高くはなく、今後益々、大神(印刷中)らが展開するような大規模な調査研究に期待されるのは大きい。おそらく別府(印刷中)が指摘するように、自閉症児が健常児とまったく同種のメカニズムによる視線理解や心的理解を十全に発達させることは難しいのかも知れない。しかし、別府が強調するように、重要なことは、たとえ(他者の意図性の理解などを必ずしも介在させない)機械的で道具的なものであるにしても、自閉症児が現に他者の視線に対して、ある程度、適切な反応を示し得るようになるということなのかも知れない。なぜならば、そうした視線に関わる諸行動やコミュニケーションは、養育者の子どもとの相互作用に対する動機づけを高め、結果的に自閉症児に多様な社会的刺激を付与することに通じ得るからである。一般的に子どもは、この世に生を受けた直後から、周囲の大人に対する注視や情動表出、さらには身体的同調(例え

ば模倣や共鳴動作)などを通して、養育者を始めとする大人からの注意を集め、また自らに対する近接や多様な養育行動を誘発すると考えられる(遠藤,1997,2005)。あるいは、大人の側に、乳児の心の存在を豊かに想像し、それに基づいて乳児に積極的な関わりをしようとする、いわゆる"心を気遣う傾向"(mind-mindedness)なるものをもたらし、結果的に子ども自身の社会性や心的理解の発達を先導し引き上げるといった機序も現実的なものとしてあるのかも知れない(Meins,1997,2001,2002)。自閉症児においては、二項関係にしても、三項関係にしても、視線に絡む諸反応を含め、こうした他者から多様な社会的刺激を誘発する行動レパートリーが元来、乏しいことが考えられ、そしてそのことが現に、本来ならば彼らの社会性の発達に潜在的に寄与し得るであろう、養育者等からの働きかけを、自ら遠ざけてしまうといった悪循環の構造があるのだろう。もし、今後、より早期段階における自閉症のスクリーニングが可能となれば、自然に生じてしまいがちな、こうした悪循環に早くから適切に介入し、自閉症児における社会性やコミュニケーションおよび言語発達上の遅滞や障害を少しでも除くことが可能となるのかも知れない。3-3)でふれたように、子どもの心的理解や社会的行動の発達において、まさに養育者等から子どもが何かを現実になされるといえることが不可欠な役割を果たしているならば、それがより確実に行われるように保証するということが、自閉症児に対する早期介入においてもやはり、最も重要な方策になるのではないだろうか。

以上、視線知覚や視線理解に関する研究の現況を示してきた。その研究は多方向的な広がりや深まりを見せると同時に、いまだ解けない"謎"としてある問題の多さを露呈しているとも言える。今後、この領域の研究がどこに進むのか、あるいは進むべきなのか、その行方を、本論を通して少しでも探っていただければ幸いである。

[引用文献] 略

\* 本論は「読む目・読まれる目：視線理解を通してみる心の源流」(遠藤利彦編・東京大学出版会,印刷中[2005 春])に掲載予定の論文を一部修正したものである。